〈2019年度博物館特別展〉「柳宗悦・棟方志功と真宗―土徳の大地と民芸の美―」開催によせて

博物館主事　学芸員　准教授　川　端　泰　幸
（日本中世史）

大谷大学博物館では、毎年10月から11月にかけて特別展を開催している。昨年2019年度は民藝運動の父とも呼ばれる思想家の柳宗悦、そして柳に師事して独自の板画や絵画などを数多く生み出し、「世界のムナカタ」と呼ばれた棟方志功、この二人と真宗信仰のつながりに着目した展覧会として企画した。

本展覧会は、公益財団法人日本民藝館、真宗大谷派（東本願寺）、そして富山の城端別院善徳寺、光徳寺、大福寺、随順寺（いずれも真宗大谷派）など、多数の機関や寺院の協力を得て開催された。

近年、大谷大学博物館では真宗の地域社会への展開や、真宗信仰が時代・社会に与えた影響などに着目した展覧会を開催しており、本展覧会もそのような流れのうえに、思想家柳宗悦と板画家棟方志功に真宗の思想や信仰が与えた影響などを紹介しようとしたものである。

暮らしのなかの実用品に「用の美」を発見し、それらの生活用具を「民藝」（民衆的工芸）と名づけた柳宗悦。柳はみずからの「直観」によって、国内外の民藝作品を数多く蒐集するとともに、民藝運動を展開した人物である。そして、その柳に才能を見出され、柳を生涯師と慕い作品を次々に生み出していった棟方志功。この二人はともに戦中・戦後に真宗王国越中富山の人びとの生活に息づく信仰風土「土徳」と出遇い、大きな影響を受けたとされる。すなわち、柳は真宗との出遇いを通じてみずからの思想を「仏教美学」として確立し、棟方も自分ではない「他力」に生かされ、使われる中での創作活動に取り組むようになったのである。

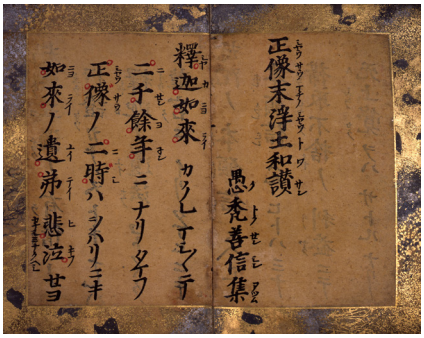
六字名号
（城端別院善徳寺蔵）

展覧会は、第１章「真宗と土徳の大地」、第２章「柳宗悦　美と仏教」、第３章「棟方志功の作品と仏教」という３つの章で構成した。

第１章では、真宗王国とも呼ばれるほど信仰の篤い越中富山において、真宗の教えがどのようにひろまっていったのか、富山真宗の歴史について城端別院善徳寺所蔵の親鸞聖人像（六角堂御通木像）や、聖徳太子像（富山県指定文化財）、蓮如上人像（富山県指定文化財）などを中心に構成した。越中に真宗が本格的にひろまるのは、本願寺第８代蓮如上人の時代であるが、真宗伝播以前より聖徳太子信仰がひろく根付いていたことなどを紹介した。

第２章は、柳宗悦が求め続けた「美」と仏教、とりわけ真宗の思想とのつながりを問う内容とした。柳は若かりし日には雑誌『白樺』発刊にも参画し、キリスト教神学や心霊現象などを研究するとともに、西洋美術に関心をもって作品を紹介していた。しかし、のちに

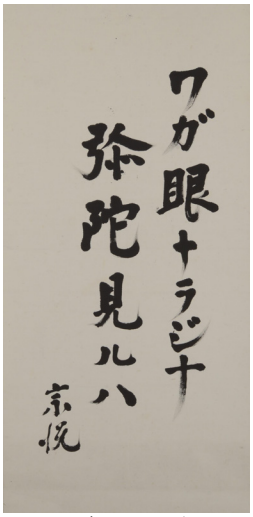
柳の眼差しは日本をふくむ東洋の民衆世界で日常的に用いられた工芸品に向けられるようになり、それらの作品を「民藝」と呼ぶようになった。そうした柳の美に対する思想はやがて「仏教美学」というかたちに結実することになる。そして柳が「仏教美学」に到達するきっかけとなったのが、富山における真宗信仰との出遇いであった。展覧会では、柳が「信心が美しくさせた本」と絶賛した、城端別院善徳寺所蔵の『三帖和讃』（富山県指定文化財）や、柳が真宗思想を表す言葉を記した墨蹟など、柳と仏教、真宗とのつながりを



『三帖和讃』
（城端別院善徳寺蔵）

示す作品を紹介した。さらに、真宗との関係で注目すべきは『仏説無量寿経』との出遇いである。ここに説かれる法蔵菩薩の四十八願のうち、第四の願「无有好醜の願」と出遇った柳は自身が追い求めていた「美」への解答を得て、『美之法門』を執筆したという。この他にも第２章では、柳の自筆原稿や、「大津絵阿弥陀如来」（日本民藝館蔵）、民画の「蓮如上人絵伝」（大福寺蔵）、柳に師事した染色家芹澤銈介の作品「法然上人像」（大福寺蔵）や、柳を強く慕っていた僧侶であり画家でもあった石黒連洲の「美之法門開闢縁起図巻」（日本民藝館蔵）なども紹介した。

第３章では、棟方志功の作品の中でも特に仏教や真宗の思想と関わる作品を展示した。棟方と富山、真宗との出遇いは、太平



ワガ眼ナラジナ
弥陀見ルハ
（大福寺蔵）

洋戦争末期にあった。福光（現南砺市）の真宗大谷派光徳寺住職であった高坂貫昭との縁から、福光を訪れた棟方は、昭和20（1945）年には家族とともに同地に疎開してしばらく生活を送った。福光の地で棟方は「他力の世界」を知るとともに、作品制作のあり方も大きく変化したという。すなわち、それまでは自分の力で制作すると考えていたが、自分の小ささや無力さを知り、他力に生かされているなかで創作活動に取り組むようになったというのである。福光時代、交流のあった寺院などに所蔵される作品として、光徳寺の本尊を描いた「黄金仏尊図」（光徳寺蔵）や「蓮如上人御忌ポスター」（光徳寺蔵）、さらには東本願寺渉成園園林堂仏間に描いた襖絵「天に伸ぶ杉木」（真宗大谷派（東本願寺）蔵）など数多くの作品を紹介した。

以上、今回は近現代日本で思想・芸術などの分野で活躍した柳・棟方と真宗信仰とのつながりという大谷大学博物館ならではの視点からの展覧会となったといえよう。なお、会期中には２度の講演会も実施し、幅広い関心をお持ちの方々に全国各地より来館、観覧いただくことができ、二人と真宗信仰とのつながりについて理解を深めていただいたように思う。